

奈良県香芝市

し も だ ひ が し い せ き

下田東遺跡

五位堂駅前北第二土地区画整理事業に伴う

平成15・16年度 発掘調査の成果



C地区の自然河道1の全景(F・G地区から東を望む)

香芝市都市整備部区画整理事課

香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館



自然河道1から出土した
人面墨書き土器(奈良時代)

はじめに

下田東遺跡は、香芝市南東部の下田東3丁目と狐井にまたがって広がる縄文時代早期から中世にかけての複合遺跡です。地形的には奈良盆地西部の馬見丘陵南西側の標高51～53mの低平地で、丘陵の縁に沿って西流する葛下川とその支流である熊谷川・山崎川・初田川が流れ込む場所に遺跡が立地しています(図1)。1970年代以降、大阪への通勤圏として馬見丘陵上には大規模ニュータウンが開発され、この低平地上に位置する近鉄五位堂駅がターミナルの役割を担い、発達してきました。これに合わせて駅周辺では市街地の整備も進められてきました。

平成13(2001)年度から駅北西に広がる水田地帯を対象に市街地整備されることになり、香芝市の施行により「五位堂駅前北第二土地区画整理事業」として開始されることになりました。

事業地面積は17ヘクタールに及び、数か年計画で工事されることから、工事区域ごとに開発事前の埋蔵文化財の発掘調査を年度ごとに「五位堂区画〇次」と称して実施することになりました。

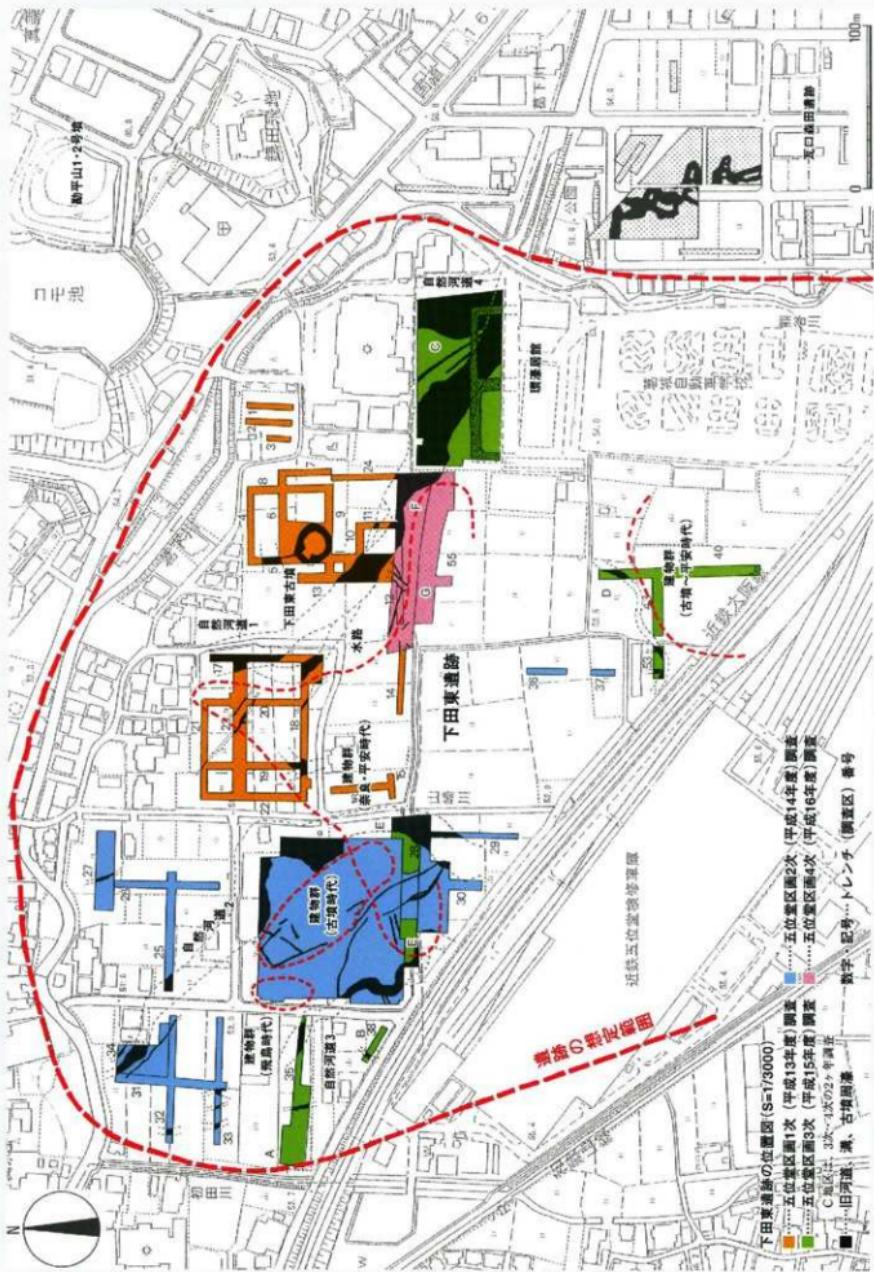
これまでの調査

平成13(2001)年度(五位堂区画1次);事業地中央を流れる山崎川の東側、事業地北東区域を対象に6093m²を調査しました。その結果、5世紀末(古墳時代中期)に築かれた墳丘長21mの帆立貝式古墳(下田東古墳)を確認し、その周濠からは円筒埴輪のほか、馬見丘陵南西側からは初めて家・鶏・馬・人物などの形象埴輪が出土しました。古墳の南側では幅15m、深さ1.8mの自然河道1(河川跡)を検出し、土師器・須恵器などの土器が出土することから6～10世紀(古墳～平安時代)に川が流れていることが判明しました。軒瓦、鳩尾、埴、凝灰岩切石、墨書き土器・人面墨書き土器・斎壇、乾元大宝(954年初鋸の銅錢)などが含まれていたことから、周辺に寺院を含めた官衙(役所)的施設の存在を考えられるようになりました。また、木の杭を立て並べて水流を変化させる堰を検出した水路(後の調査で自然河道1の一部と判明。)では、馬鍔・円面硯(すずり)などが出土しました。古墳の西側では8～10世紀(奈良～平安時代)の掘立柱建物・井戸を検出しています。

平成14(2002)年度(五位堂区画2次);山崎川の西側から初田川までの事業地西側区域を対象に14622m²(延べ面積16264m²)を調査しました。その結果、微高地上に5世紀末～6世紀初(古墳時代)の溝で周囲を区画する平地式か高床式の建物群を検出しました。この北東側を蛇行する自然河道2の上層では同時期の土師器・須恵器が完全な形を保ちながら、夥しい量で出土しました。下田東古墳を対岸に望み、祭祀を行っていたと考えられます。微高地上では7世紀(飛鳥時代)以降も建物群が形成されており、なかでも8～10世紀(奈良～平安時代)には大型建物(柱間2×5間)が含まれ、石帶(官人の帶飾り)が出土地したことから官衙的施設として注目されます。建物群が廃絶したあと、調査区全域で見られる素掘小溝(耕作痕跡)は、瓦器などの出土遺物より14世紀前半(鎌倉時代～室町時代)には耕作地化されていたと考えられます。また、自然河道2の上層の下流域も調査し、4世紀前半～6世紀中頃(古墳時代)の土師器・須恵器が出土し、下層では縄文時代前期(北白川下層IIc式期)～晩期(長原式期)、弥生時代前期の土器・石器が多数出土しました。

平成15(2003)年度(五位堂区画3次);前年度工事でできなかった残部区域(A・B・E地区)と事業地東側区域を対象にC・D地区の4箇所8593m²を調査しました。

平成16(2004)年度(五位堂区画4次);事業地中央を東西に貫いて付け替えられる葛下川の新しい流路部分を対象にC・F・G地区の3箇所4743m²を調査しました。



A・B地区の調査 -自然河道と耕作痕跡-

事業地の西端、直線状に北へ流れる初田川に面した東側区域を調査しました。

A地区は、平成14(2002)年度にも調査し、自然河道3(河川跡)を検出しています。白色砂の中には、ほとんど遺物がありませんでしたが、川が埋まった後もその両側に浅い窪地^{くぼち}が広がり、湿地として残っていたようです。付近には、北西方向へ幾筋かの流路(小川)が流れていることが判っています。

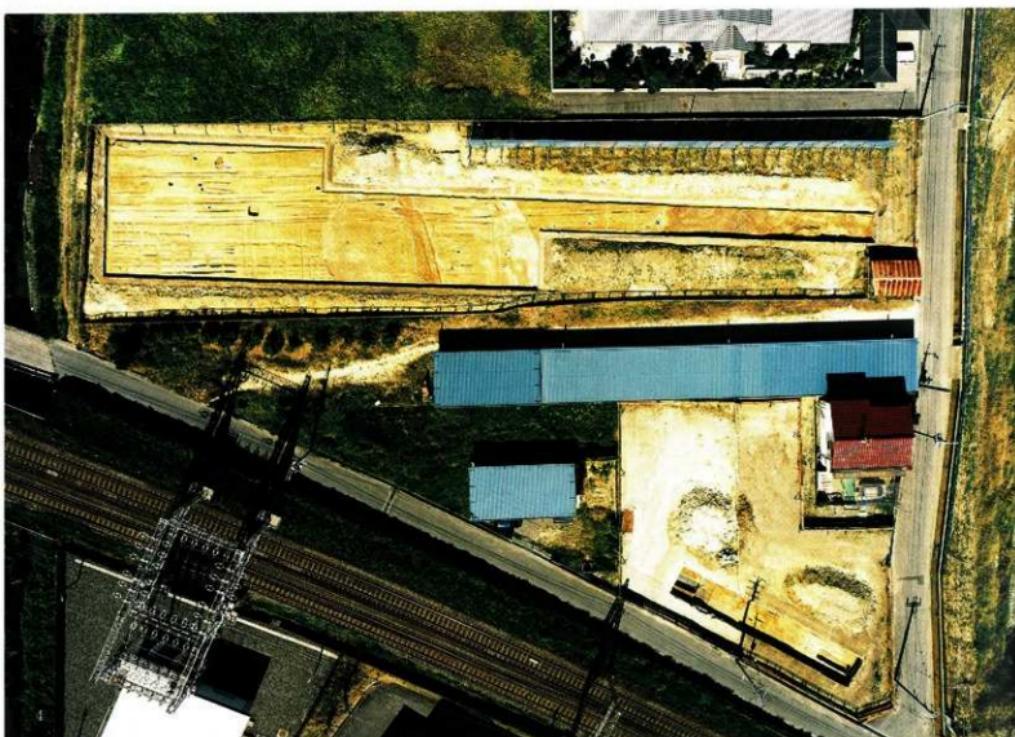
初田川に近い区域では、現在の水田耕作地面より深さ0.3mほど掘り下げるところでは黄褐色粘土の地盤(ベース; 遺構面)が現れます。ここに東西や南北方向の素掘小溝(耕作痕跡)が無数に掘り込まれているのを確認しました。ところどころに土坑(穴)やピット(小穴)がありますが全体的には少なく、長い期間にわたって耕作地としてこの土地は使われていたのでしょうか。

B地区は、A地区の少し南東側の地点で、調査区からは流路のほか柱穴跡8基を検出しました。しかし、残り具合が良くなく、遺物の出土もほとんどありませんでした。このことから本来の地盤は削られて、現在よりも高いところに遺構が存在していたことがわかりました。

この北西側200mの地点でも、最近発掘調査が行われ(奈良県立橿原考古学研究所2004年度調査)、A・B地区と同様にほとんど遺構が検出されませんでした。国道165号線を越えた北側では、縄文時代後期～晩期の土器片が出土することから(下田遺跡)、初田川左岸～国道165号線南側の範囲は遺構が存在しない区域と考えられ、E地区から遺構は現われます。

両地区的調査から、初田川周辺は遺構の密度が低い地域であることがわかりました。

A・B地区の全景 (南上空から;左端が初田川。上がA地区、下がB地区。)



C地区の調査 -古墳時代から明治時代まで-

事業地の東端、北へ流れる熊谷川と葛下川が合流する地点に面した西側区域を調査しました。

ここは、北側をメリヤス工場に南側を自動車学校に挟まれた面積約6,000m²のほぼ長方形状の土地が広がっており、調査前の現状では、土地全域に葛が生い茂って人の立ち入ることができないほど荒地となっていました。その土地の中ほどに3つの高まりがあり、当初は何らかの遺構が残されているのではないかと期待されていました。

調査に取り掛かるとその期待はすぐに裏切られるものとなりました。除草したところ、表土は宅地造成用の客土（土砂）が平均0.3mほどの厚さで覆われ、整地されていたからです。3つの高まりは余った土砂のかたまりで、遺跡を予測して調査することの難しさを考えさせられます。

造成土下には水田耕作土（厚さ0.2m）と、その下に河川の氾濫による褐色砂質土の洪水堆積層が厚さ平均0.5mで堆積しています。その下に黄褐色粘質土の地盤とする第1～3の遺構面が残されていることがわかりました。

第1遺構面；おもに17世紀（江戸時代）～19世紀末（明治時代）

第2遺構面；おもに12世紀末（鎌倉時代）～15世紀（室町時代）

第3遺構面；おもに4世紀（古墳時代前期）～10世紀（平安時代）

平成15（2003）年度に第1～2遺構面を調査し、平成16（2004）年度に第3遺構面を調査することにしました。

C地区の全景（南上空から；右端が熊谷川。番号は次ページ以降の写真番号と対応）



C地区 第1～2遺構面 平成15(2003)年度の調査 -中世の居館と井戸-



① 環濠居館跡(14世紀後半～15世紀初頭)全景 (東から;背後左は二上山)



② 東側濠 (北から;幅3.6～4.1m、深さ1.0～1.2m)



③ 西側濠 (北から;幅5～7m、深さ1.5～2.0m)



6

④ 主屋建物がある西側区画の調査風景(東から)



⑤ 主屋建物と方形土坑・井戸(東から)

この調査区では、標高52.0m前後(第3遺構面)に黄褐色粘質土の硬い地盤に遺構が残されていました。ここを何度も河川の氾濫によって地表面がかさ上げされているため、第1遺構面は標高52.3m前後、第2遺構面は52.1m前後から多くの遺構が掘り込まれています。

第1～2遺構面では調査区の北東側と南西側に、東西・南北方向の素掘小溝群と井戸が確認されており、第2遺構面では、調査区の南側に環濠居館があります。

環濠居館 深い大溝(濠)で周囲を囲んだ中世の有力者の館で、15年度の調査で初めて確認しました。長さ96mの東西大溝(濠)1条とその両端と中央から南に延びる南北大溝(濠)3条を長さ20m分があり、上空から見ると「山」の字形に見えます。濠に区切られる内側には、標高52.6m程度まで盛り土がなされた東側区画・西側区画と呼んでいる2つの屋敷地があります。

西側区画には、柱間(柱と柱の間隔=1間)が2.6mの礎石建物を4間×1間分検出しました。屋敷地の中心に位置するため主屋(母屋)と考えられます。この北西に接するように1辺2m・深さ0.6mの方形土坑があり、瓦質土器の羽釜・火鉢、土師質土器の小皿が完全な形で8点出土しました。

これに対して東側区画は、遺構がありませんでした。ただし中央の濠内には、ここから投げ入れられたこぶしほどの大きさの石、凝灰岩の加工石を含む石材があり、何らかの施設があったと考えられます。

西側区画を取り巻く濠は幅5～7m・深さ1.5～2.0mあり、東側区画では、幅3.6～4.1m・深さ1.0～1.2mと規模が小さくなっています。これは西側区画に主屋となる礎石建物が重要だったためでしょう。

井戸 環濠居館の方形土坑北側にあり、井戸の掘形(大きな穴)は直径6mを測ります。井戸枠の上部は、建築廃材などの丸太を格子状に組んだ蓋材で覆われていました。井戸枠は幅20cm×長さ180cmの板材を立てて円形に並べ、編んだ竹材で束ねて組んだ「結桶」を3段以上重ね合わせた立派なものでした。井戸枠の外側に「郡役所」と墨書きされており、19世紀末(明治時代)に築かれたと考えられます。



⑥ 土蓋出土状況(北から;東側濠内)



⑦ 井戸(19世紀末)蓋材検出状況(南から)



⑧ 方形土坑(15世紀初頭)遺物出土状況(南から)



井戸、結構の井戸枠1段目の外側(南から)



⑨ 自然河道1(7世紀～10世紀) 全景(南東から)



⑩ 堤防状遺構と木製舞出土状況(南西から)



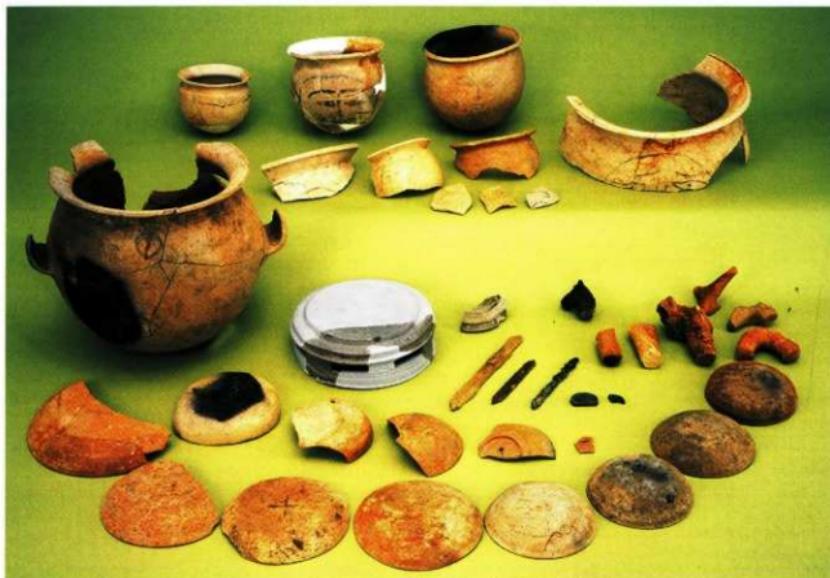
⑪ 堤防状遺構に埋き止められた大量の土器(南東から)



⑫ 蚕(エリ;漁撈施設)状の杭列遺構(東から)



⑬ 川岸にある人間や牛馬の足跡(南から)



自然河道1とその周辺で出土した遺物

第3遺構面は、調査区全域の硬い粘質土を地盤として存在します。それまでの遺構が全てこの地盤を掘り込んでいるので、素掘小溝など遺構が重なり合っているところでは、残り具合がよくありませんでした。しかし、それ以外でこの地盤から掘り込まれているのは、古墳時代～奈良時代の2つの河川跡と溝など数えるほどでした。

自然河道1 調査区の南東隅と北西隅を結ぶ対角線上に、長さ130m分を検出しました。幅は狭い所で20m、広い所で30mあります。深さは浅い所で0.2m、深い所で1.7mあり、川の流れは南東から北西方向に流れています。この川岸から川中にかけては、遺構が残されていました。川岸に平行して木杭が打ち込まれている杭列は護岸施設で、調査区の南東・中央・北西に集中して築かれていました。また、調査区の北西では、幹周りの太い杭を使った橋脚跡、細いものを幅5m・長さ10mにわたって杭列を束にした堤防(ミニ・ダム)状遺構が見つかりました。この少し東側20m地点の川の浅瀬には、窪みの両側に杭列が2列あります。漁撈施設の軸に似た杭列遺構があります。

川を埋めた土砂は、細かい砂・粗い砂・粘質土が折り重なるように堆積し、それぞれの堆積の厚さは地点ごとに変化しています。これらに含まれるそれぞれの時代の石器や土器の種類や量から、流路の位置が変化していることがわかります。深い所で飛鳥時代の遺物が多く出土しました。土師器・須恵器のほかに壇(陀寺式)・軒丸瓦(川原寺式)・軒平瓦(四重張文)など古代寺院に関係する遺物も含まれていました。その上層から浅い所にかけては奈良時代の遺物が多く出土しました。多くの完全な形を保っているものが多く含まれていました。この近くで捨てられたと思われます。

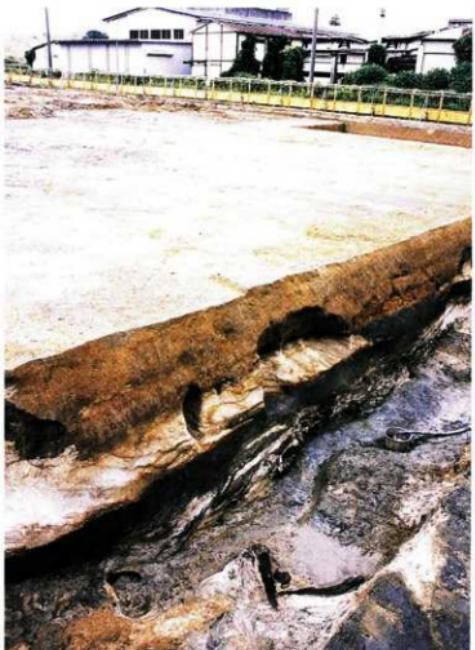
今回注目されるのは、橋脚跡・堤防状遺構の周辺で墨書き土器・人面墨書き土器・斎車・土馬・馬齒など「裁え」の儀式に使うとされる律令祭祀(おまつり)に関わる遺物が出土したことです。平成13(2001)年度の下流域の調査でもこれらが出土しているため、自然河道1の各所で祭祀が行われた可能性があります。

これらは、平城京・長岡京など8～9世紀の都やその周辺で多く出土しており、近くに都にゆかりの人物がいたのでしょう。

C地区 第3遺構面 平成16(2004)年度の調査 -古墳時代中期の木製鞍-



⑪ 自然河道4(4世紀～6世紀)全景(南から)



⑫ 木製鞍と土器出土状況(南から)



⑬ 木製鞍(東から)



⑭ 山陰系の古式土師器出土状況(南東から)

自然河道4 C地区の東側にあり、すぐ東側は現在の葛下川が流れています。上空から見ると「く」字形で、長さ60m分を検出しました。調査区の南東隅で自然河道1が重なっていて、自然河道4は1よりも古い時代の河川跡ということがわかります。実際、この河川跡に含まれる遺物は、4~6世紀(古墳時代)にかけてのものです。幅は東岸が検出できていないため、30m以上になります。ただし、川に堆積する土層の状況と含まれる土器の種類と量から東側幅20m分が4~5世紀(古墳時代前期~中期前半)、西側幅20m分が5~6世紀(古墳時代中期後半~後期)の流路に分かれます。

古墳時代前期~中期前半の流路からは木製品と土器が出土しています。木製品では鋤(長さ1.2mの土を掘る道具)とホゾ穴が加工された箱状製品の部材が砂層の下の黒色粘土層から出土しました。粘土層は外気との密閉度が高く保水も充分だったため、完全な形を保っていました。その黒色粘土層の下の砂層から出土した鞍(馬具の一部)は注目されます。横幅41.2cm、高さ20cm、厚さ1~3cmの三日月形の「後輪」という鞍の部品で、乗馬の際に人の背もたれに当たります。古墳時代の木製鞍としては全国で17例目(県内で3例目)になります。鞍の直近では5世紀前半(古墳時代中期)の古式土師器が多く出土していることから、全国でも最古級と思われます。日本に乗馬風習は、この時期に朝鮮半島南部から伝えられたと考えられており、近畿地方では生駒山麓の北西側(大阪府四条畷市の周辺)に馬飼い集団が移り住み、馬を放牧しながら馬具を製作していたと考えられています。馬見丘陵の南西側には、比較的早い段階で乗馬の風習が伝わっていることが、これによって証明されたと言えるでしょう。



⑪ 木製鋤と木製部材の出土状況(南から)



⑫ 青文時代前期の多角形底の土器(北から)



⑬ 溝1土層断面と須恵器(西から)



⑭ 自然河道4埋没後の素掘斜行溝(南西から)

D地区の調査 -飛鳥と平安時代の井戸-

事業地南側、近鉄大阪線の線路北側に接した街区道路を建設する部分の調査です。

この調査区では、5世紀(古墳時代中期)~8世紀(奈良時代)の流路・土坑・井戸・柱穴・溝の約250基の遺構が全域に広がっていました。遺構の掘られた地盤は、しっかりした粘質土のほかに、湧き水が著しく、水はけが良くないと考えられる砂地にまで及んでいました。

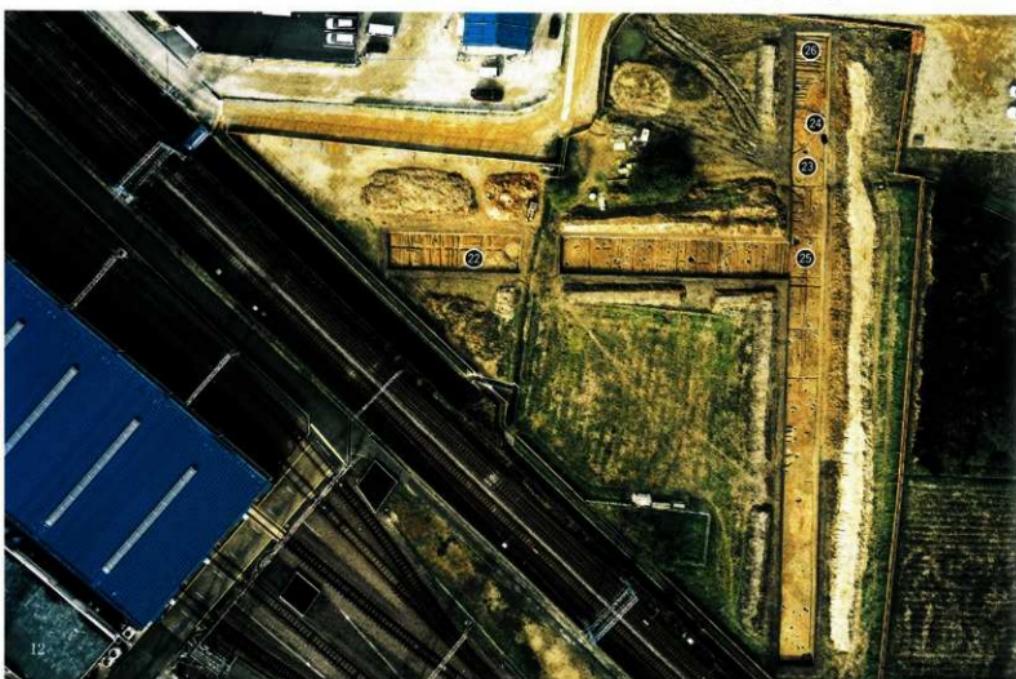
流路1 調査区の中央を西から東へ蛇行し、幅6mで深さ0.5mと浅く小さなものですが、もともと砂地を流れていた大きな自然河道(河川跡)の名残と考えられます。しかし、埋まった土を観察すると川の流れに沿って筋状に埋まっており、川底もその筋に沿った滑らかではない形状でした。これは人工的に改造された可能性があります。また、流路1の左岸の素掘小溝は、東西方向に掘られ、右岸のものは南北方向に掘られるというように分かれており、埋没後も土地境界の区画される位置として意識されていたと考えられます。遺物は、土師器の鉢が見つかっています。

土器埋納遺構 調査区の中央、長軸1.1m・短軸1.0m・深さ0.8mの土坑です。この中に5世紀(古墳時代中期)の土師器の壺や甕が3つ埋めて納められていました。

井戸1 調査区の北側、直径・深さともに1.7mで、直径1mにもなる櫛の木を半分に割ってその内側を削り貫いた木材どうしを合わせて井戸枠に使用した井戸です。この井戸からは7世紀(飛鳥時代)の須恵器の壺が出土し、井戸底からはドングリが多数出土しました。

井戸2 調査区の中央、直径1.5m前後・深さ1mで、四隅に柱を置き、立て板を組んで井戸枠としている、平安時代の井戸です。枠内には更に方形の曲物(わっぱ;木製の容器)の側板が据えられ、清らかな湧き水を得るための工夫がされていました。

D地区の全景 (南上空から;下は近鉄大阪線線路。番号は次ページの写真番号と対応)

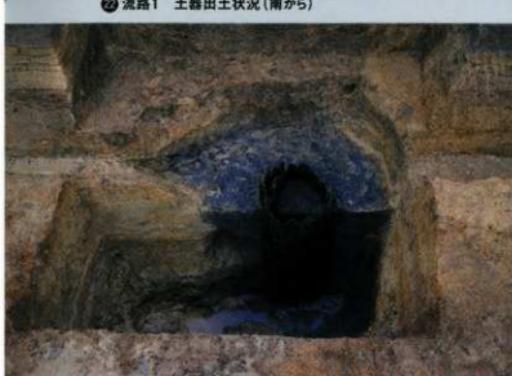




㉑ 流路1 土器出土状況(南から)



㉒ 土器埋納遺構(南から)



㉓ 合口式の割賣材を使用した井戸1(西から)



㉔ 方形曲物側板を転用した井戸2(東から)



㉕ 40トレンチ全景(北から;手前にカーブしているのが流路1)



F・G地区の全景（南上空から；上半がF地区、下半がG地区。番号は次ページの文中と写真番号と対応）

F・G地区の調査 -飛鳥・奈良時代の建物群と井戸-

F・G地区は、C地区の西隣の調査区です。これらの調査区は、事業地中央を東西に貫いて、現在事業地の北側を迂回している葛下川の新しい流路の付け替え予定地にあたります。

平成16(2004)年度の工事行程の関係上、北側をF地区、南側をG地区として分割して調査しました。

両調査区の東端では、C地区から引き続いて自然河道1(飛鳥時代～平安時代)を検出しました。土師器・須恵器などの土器が出土しました。平成13(2001)年度に調査したこの調査区の北側と併せて、この周辺の自然河道1のはば全体を調査したことになります。

自然河道の西側には、安定した地盤に遺構が広がっています。特に掘立柱建物・井戸・土坑・溝が両調査区の西側と中央に集中しています。

両調査区中央の掘立柱建物群は、大小あわせて16棟分を確認しました。これらにはほぼ同じ位置で重なり合っているものもあるため、建て直しが行われていることがわかります。建物の多くは中心軸・配列ともに東西南北の方位に合わせており、このうち最も大きい柱間2間×4間の1棟を中心に、他の建物や塀が建て並べられ、井戸が配置されています。

西側の掘立柱建物群は7棟分を確認しています。こちらも多くが方位を意識して建てられていますが、方位とは関係がない地形を意識して造られた直線状の区画溝の方向に平行して建てられたものがあります。

掘立柱建物の柱穴からは遺物は多く出土しませんが、井戸からは8世紀(奈良時代)頃の土師器の皿が、区画溝からは7世紀(飛鳥時代)頃の土師器の壺が出土していることから、飛鳥時代～奈良時代のものと考えられます。

F・G両調査区では、井戸を4基検出しています。それぞれが掘立柱建物の近くにあります。また、掘立柱建物の柱穴にはほとんど遺物が残されないのに対して、井戸ではその使用に際して投棄された遺物が多く出土します。これらの井戸3~6はそれぞれの様子が異なり、遺跡の性格を考える上で貴重な資料となるでしょう。

井戸3 調査区の西側にある長径0.8m・短径0.5m、深さ0.45mの楕円形の井戸です。8世紀(奈良時代)の土師器の把手付甕の底が抜けたものを2つ上下に重ね合わせて2段積みの集水施設(浄水を得るために井戸枠)にしています。

井戸4 調査区の中央にある直径1.2m、深さ1.1mの方形の井戸です。上の方は四角くなるように板を立て並べ、下の方は曲物(木製の薄皮円筒容器)側板を3段に積み上げて井戸枠にしています。この中に鉄製刀子、木製櫛のほかに墨書き土器が6点含まれていました。皿の裏側には「天」「東」「西」などの漢字や記号が書かれており、柱間2間×4間の掘立柱建物を中心に並ぶ建物群に囲まれた空間にあることから、これらの建物の呼び名や機能と関わって、そこで使用されていたものでしょうか。

井戸5 調査区の東側にある直径0.9m、深さ0.85mの円形の井戸です。平安時代の土師器が出土しています(左ページ写真の⑩)。

井戸6 調査区の東側にある直径4.2m、深さ1.4mの円形の井戸です。しゃこうしたときぬからわら飛鳥時代の斜格子叩目平瓦を集水施設に転用し、その内側から奈良時代の土師器があり、墨書き土器も含まれていました。

ここでも数多くの素掘小溝が東西・南北走行に掘られていますが、井戸3はその上面を素掘小溝に壊され、井戸5は素掘小溝を壊して築かれています。このことから、素掘小溝の築かれた時期が判断できます(平安時代)。



⑩ 土器を置いた集水施設をもつ井戸3(北から)



⑪ 曲物側板を井戸枠に使用した井戸4(東から)



⑫ 平瓦を集水施設に使用した井戸6(東から)



⑬ G地区中央の2間×4間の掘立柱建物(南から)



自然河道1から出土した勾玉と素文鏡（拡大）



⑫環濠外側の井戸から出土した木製漆塗り梳



市民参加の「ふたかみ発掘体験」(2004.11.20)



自然河道を掘る市民の皆さん

まとめ

2003(平成15)年度の調査では、事業地の東側と南側で新たに遺構が確認され、事業地全域が遺跡であることが分かりました。現在でも河川が合流し、多雨時の水害に悩まされてきたこの地域に遺跡は殆ど存在しないと考えられてきましたが、覆される結果となりました。

事業地東側では未知の環濠居館を初めて確認し、室町時代のこの地域の支配者層(岡氏一族・下田氏)の動きを考える上で重要な発見となりました。しかし、今回は北側一部のみの発掘にとどまり、今後の調査によって全体を明らかにする必要があります。

南側では、古墳時代～平安時代の集落跡が展開することが判明しました。今後その広がりを把握する必要があります。このことは下田東遺跡の範囲を確定することにもなりますが、事業地西側の初田川付近では、耕作地になる以前の本来の地形が高く、遺構が希薄であることが判明し、下田東遺跡の西端をほぼ確定することができました。

2004(平成16)年度の調査では、飛鳥～平安時代、特に奈良時代の河川跡と掘立柱建物群の遺構を広範囲に明らかにすることができました。河川跡はすぐ東脇を流れる葛下川の旧流路にあてはまるとして間違ひありません。自然河道4(古墳時代)→自然河道1(飛鳥～平安時代)→現在の流路と古代からの葛下川の流路の移り変わりを知ることができます。自然河道1では、川岸に築かれた護岸・堤防状・橋脚の、それぞれの遺構の場所で人面墨書き土器・土馬などを使用した律令祭祀が行われていたことが分かりました。また、そのすぐ西側にはほぼ整然と配列された掘立柱建物群があり、近くの井戸から出土した墨書き土器や、すでに出土している円面鏡・石帯(腰帶飾り)からみて葛下郡衙を含め、その影響下の官衙的施設と考えられます。この地域の安定を願い、都に所縁のある役人が祭祀に関わりながら治めていたのでしょうか。(調査担当 湯本整、金松誠、波多野篤、巽義夫)